

戦国時代を生き抜き、江戸幕府を創始した徳川家康という存在は、数多くの女性に支えられていたと言えます。家康とともに乱世を生きた彼女たちの姿は、同時代、あるいは後世にさまざまなかたちで書き留められ、今日まで伝えられています。近年、それらの叙述について真偽の解明が進み、一方では、新たな人物像を描く文学・演劇もあります。本小特集では、歴史書・縁起・地誌・伝記など、彼女たちの生き様について叙述する本学附属図書館所蔵の多様な古典籍を取り上げ、紹介します。



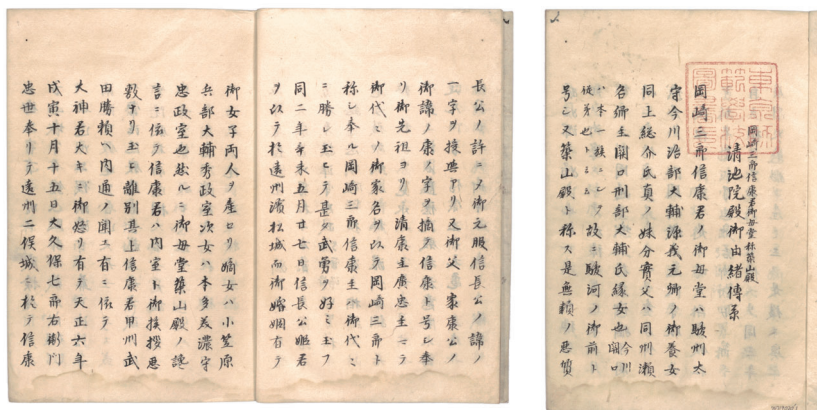
1 幕府祚胤伝 巻天 (2巻2冊の内)
 ばくふ そいんでん
 竹尾次春 [編] 江戸期写

徳川將軍家の系図集。本資料は、幕末に徳川家菩提寺増上寺学寮を掌り、明治期には浄土宗管長となった養鷗徹定の旧蔵。徳川家康の事蹟も詳述される。家康は、本資料に記されるように、天文 11(1542) 年 12 月 26 日、すなわち帝王の資質を有することを示す寅の年、寅の日、寅の刻に誕生したと伝えられている。しかし近年、征夷大將軍に補任された慶長 8(1603) 年の願文に 61 歳(数え年)と記していることから、天文 12 年・卯年生まれとする説が出されている。元和 2(1616) 年 4 月 17 日に薨去すると、東照大権現の神号が勅許された。〔タ 120-88〕



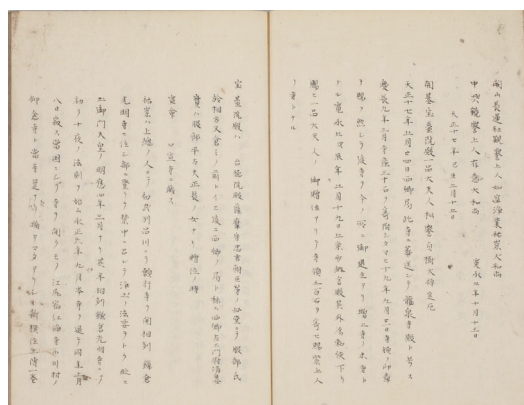
2 東照大権現縁起 5巻1冊 江戸期写
 どうしょうだいこんげんえんぎ

孫の將軍家光が天海に命じて編纂し、寛永 17(1640) 年に奉納した家康の事蹟および東照大権現の神格を説く仮名縁起(絵巻物)の写本。本資料は寛文 6(1666) 年写本を底本とするが、絵を省略する。巻第 1 の第 1・2 段には、父松平広忠が北の方、すなわち正室の^{おだい}於大(水野氏、伝通院)をともない、三河国(愛知県)の鳳来寺を参詣して子宝を授かるよう祈願し、その利益によって家康が誕生した奇瑞を記す。於大は、この後に生家が織田信秀方についたことから離縁され、幼名を竹千代と称した家康とも別れることになった。〔175.932-To72〕



3 柳 宮婦女伝 系 ^{りゆうえい ふ じょでん} 巻之2 (6巻6冊の内) 江戸期写

10代将軍家治までの徳川歴代将軍生母・妻妾の伝記集。本資料に載る^{つきやまどの}築山殿(関口氏、清池院)は、駿河国(静岡県)の戦国大名今川義元の縁者で、家康の正室となった。義元が桶狭間の戦いで織田信長に敗れると、家康は今川家を離反し、築山殿との間にもうけた長男信康の正室に信長の娘徳姫を迎えた。本資料では、築山殿が、対立する徳姫の信長への訴え、そして家康・信長と対立する武田勝頼への内通により、信康とともに処断されたと記す。近年、このような逸話は、後世に創られた虚像と考えられている。〔タ 120-41〕

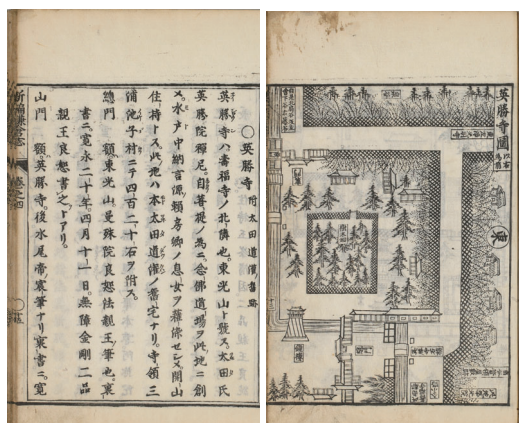


4 駿河国新風土記 巻3 (25巻25冊の内) ^{するがのくにしん ふ ど き} 森宗芳, 河野通春記; 新庄道雄撰 江戸期写

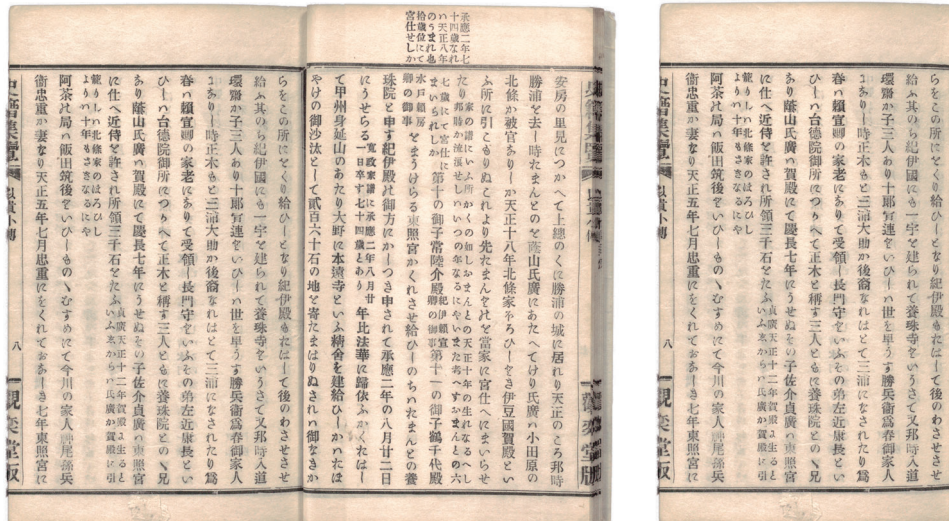
地域の国学者によって天保5(1834)年に完成された駿河国の民間地誌。駿府城下(静岡県静岡市)の下魚町に所在する宝台院は、家康の側室、2代将軍秀忠の生母である^{おあい}於愛(昌子、西郷氏、宝台院)を祀る寺院である。同院は、徳川将軍家の庇護を受け、また、浄土宗内で引込紫衣地と呼ばれる格式の高い寺院であった。境内には於愛の供養塔が現存し、寛永5(1628)年に秀忠のはたらきかけにより従一位を追贈されたさいの後水尾天皇宣命・位記が伝えられている。〔ネ 318-7〕

5 新編鎌倉志 巻之4 (8巻9冊の内) ^{しんぺんかまくらし}

河井恒久纂述; 松村清之考訂; 力石忠一参補
[京]: 柳枝軒茨木方淑 貞享2(1685)年刊



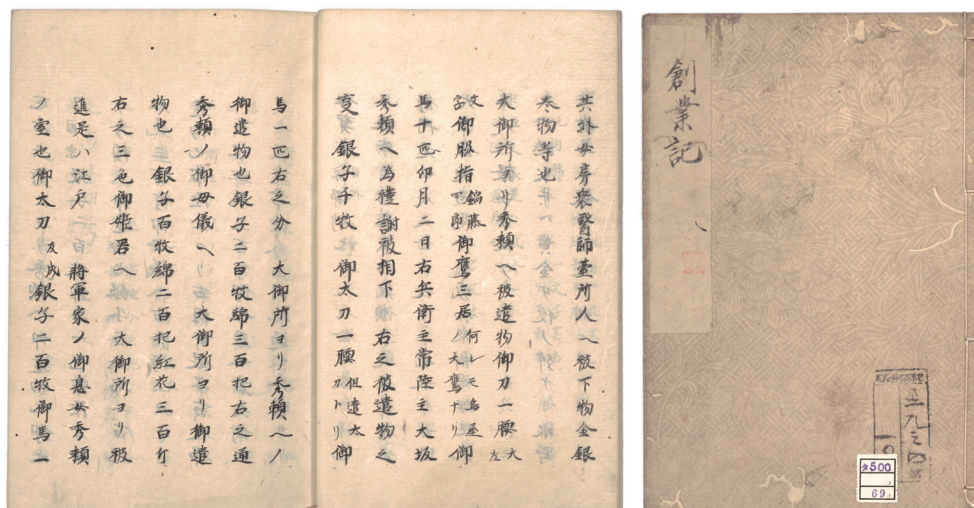
本資料は江戸前期に京都の書肆柳枝軒茨木方淑(多左衛門)が刊行した相模国(神奈川県)鎌倉の地誌。鎌倉の扇谷にある英勝寺は、家康の側室で、水戸藩主徳川頼房の養母であった^{おかじ}於梶(於勝、太田氏、英勝院)が自身の菩提のために建立した寺院である。その住持には代々、水戸徳川家の子女が迎えられ、「水戸御殿」「水戸の尼寺」とも称された。於梶は聡明で、男子であれば良い大将になれたらと惜しまれたと言う。〔ネ 314-93〕



6 以貴小伝 1冊 (史籍集覧の内)

秋山内記 [著]; 近藤瓶城 [校] 東京: 近藤瓶城 明治 18(1885) 年刊

10 代将軍家治までの徳川歴代将軍生母・妻妾の伝記集。本資料では、家康の側室の一人であった阿茶局(飯田氏、雲光院)は、「才覚」ある女性と評されている。しばしば合戦の陣中にも呼び寄せられ、大坂の陣では、淀殿・於江与の姉妹である常高院(於初、浅井氏、京極高次正室)とともに大坂城に出向き、和平交渉に臨んだ。家康薨去後に 2 代将軍秀忠の息女和子が後水尾天皇の中宮として入内するさいには、その生母於江与の代理として上洛、参内し、従一位に叙せられた。〔ヨ 130-22〕



7 創業記考異 巻之 11 (15 巻 10 冊の内)

松平忠明 [著]; 徳川光貞 [補] 江戸期写

幕臣松平忠冬が編み紀伊徳川家の 2 代光貞が補訂した徳川家康による幕府創業の年代記で、本資料は貞享 2(1685) 年に没した磐城平藩主内藤藤虎の旧蔵書。大御所徳川家康は、慶長 16(1611) 年 3 月に後陽成天皇譲位・後水尾天皇即位のために上洛したさいに、豊臣秀頼と二条城で対面した。両者が互いに贈り合った品々が見える。その中に、「江戸将軍家ノ御息女、秀頼ノ室」である千姫(天樹院)への銀子・紅花も書き上げられる。豊臣家に嫁した孫娘を気遣う家康の思いを想像させられる。

[タ 500-69]



8 ^{めいりょうこうはん} 明良洪範 卷之24 40巻40冊の内
真田増誉述；山崎直行校 [京]：郁文堂 江戸期刊

江戸中期に江戸千駄ヶ谷聖輪寺の住持増誉が編纂した武家の言行・事蹟集。その婦人伝の中に、^{かすがのつぼね}春日局(福、福子、斎藤氏、麟祥院)が取り上げられる。春日局は、明智光秀家臣斎藤利三の娘で、徳川家譜代である稲葉正成の正室となった。秀忠と於江与の間に待望の男子である竹千代(3代将軍家光)が生まれると、その乳母となり、以後、生涯を通じて家光に奉仕した。家光を将軍家の世嗣とするべく家康に訴えたとも言われており、東照大権現に家光の息災を祈念して捧げた祝詞も現存している。
〔タ 400-13〕



9 ^{しんくんおんしょうつし} 神君御書写 1冊 江戸期写

「神君より秀忠公御台所江被進候御書写」を内題とする。「御遺訓百か条」と同様に、徳川家康が遺言として記した書状の写本であるが、後世に捏造された偽文書である。江戸時代には、社会規範を述べる書物として、広く巷間に流布した。2代将軍秀忠の御台所(正室)である^{おえよ}於江与(於江、達子、浅井氏、崇源院)に対し、御台所としての心構えが説かれる。偽文書とはいえ、徳川家康が天下人となるまで彼を支えた女性たちのあり方を考えるさいに示唆を与えられる書物である。
〔ヨ 219-216〕

筑波大学附属図書館常設展解説シート「小特集 家康を支えた女性たち」

解説 山澤 学(人文社会系准教授)

令和6(2024)年11月1日 編集・発行 筑波大学附属図書館特別展 WG